

現代朝鮮語における比況表現について(1)

— -tis(i), tis(i), tisha-, jag とその構文論上の制約 —

深 見 兼 孝

1 はじめに

「比況表現」という国語学の用語は、比較的頻繁に用いられているにも拘らず、厳密な定義が伴っていないように思える¹⁾。そこで、議論を進めていく上での一応の拠所として、今後はこれを次のように理解しておこう：

比況表現は、その表現意図が喩えであり、少なくともその表わす有生物、無生物、抽象物および一切の事柄がなにかの喩えである A と、そのことを明示する標識 B を含む文によってなされる。

比況表現をこのように理解して現代朝鮮語を見る時、その名に値する表現をそこにも見出すことができる。しかしながら、朝鮮語学はその独自の用語を持ち合わせていないので、この国語学の用語を借りて仮りに比況表現と呼んでおくことにしよう。

本小稿は、現代朝鮮語において上の「標識 B」に相当するもののうち、名詞、指定詞および用語に連結するもの²⁾ に関する一連の研究の手始めとして、用語の語幹に連結する語尾 -tis(i)、用語または指定詞の冠詞形に連結する副詞 tis(i)³⁾、補助形容詞 tisha-、形式名詞 jag の構文論上の制約⁴⁾ を明らかにしようとしたものである。

2 語尾 -tis(i) と副詞 tis(i)

両者は形態が同じである上、副詞節(句)を導くという点でも同一である。まず、副詞節を導く例から見てみよう。次の例文を見られたい。{| 内の左側の下線が語尾 -tis(i)、右側の下線が副詞 tis(i) である。

1 t'am i mul i hɭɭi {tis(i) / nɭn tis(i)} ima lil nɛɭjəo nta.
“汗” 主 “水” 主 “流れる” 現冠 “額” 対 “下る” 終

2 kojəɳi ka tʃɥi lil tʃap {tis(i) / nɭn tis(i)} kɭ nɭn tɛmpjɛtɭl əs' ta.
“猫” 主 “ねずみ” 対 “捕える” 現冠 “彼” 話 “襲いかかる” 過 終

3 kɭ pɭltɨg ɭn kəɳn i sə is' {tis(i) / nɭn tis(i)} hanɭɭ ɭl hjaɳɥe nɔp'i sosa
“その” “ビル” 話 “巨人” 話 “立っている” 現冠 “空” 対 “向かって” “高く” “聳えている”

oliko is' əs' ta.
過 終

4 i tosi nin matf'i simin til i pjəg tilə is' { 'tis(i) / nin tis(i) }
“この”“都市”話 “まるで” “市民” 複 主 “病気に罹っている” 現冠

hwəp'jehako is' ta.
“荒廃している” 終

5 ki həpən in pata k'atfi tfam tile is' { *tis(i) / nin tis(i) } tfojəhes' (
“その”“浜辺” 話 “海” “まで”“眠っている” 現冠

< tfojəgha jəs') ta.
“静かだ” 過 終

副詞 *tis(i)* がどの例文にも用いられる一方、語尾 *-tis(i)* は例文 4, 5 では用いられない。これらの 2 例においては語尾 *-tis(i)* が連結している動詞⁵⁾ が無意志の状態を表わしていることに注目された。これに対し、語尾 *-tis(i)* が用いられる例文 1 ~ 3 においては、直前の動詞は順に出来事、動作、意志の状態を表わしている。ここから、語尾 *-tis(i)* は無意識の状態を表わす動詞には連結されないという制約があると言えよう⁶⁾。

次の例文は語尾 *-tis(i)* と副詞 *tis(i)* が副詞句を導いている例である。例文 8 に語尾 *-tis(i)* が用いられないことについても、例文 4, 5 の場合と同じ説明をすることができよう。

6 ki nin nepet' { *tis(i)* / nin *tis(i)* } malhes' (< malha jəs') ta.
“彼” 話 “吐く” 現冠 “言う” 過 終

7 na nin matf'i s'ilətfi { *tis(i)* / nin *tis(i)* } ki tfali e antf as' ta.
“私” 話 “まるで”“倒れる” 現冠 “その”“場” 処 “座る” 過 終

8 simja ti kjosil in tfukə is' { **tis(i)* / nin *tis(i)* } kojoha ta.
“深夜” 属 “教室” 話 “死んでいる” 現冠 “静かだ” 終

また、ここでも副詞 *tis(i)* を用いた文は適格文である。副詞 *tis(i)* については特別な制約は存在しないのだろう。

3 語尾 *-tis(i)* + *ha-* と補助形容詞 *tisha-*

語尾 *-tis* が *ha-* を伴った形態は、全体として補助形容詞 *tisha-* と同一であり⁷⁾、終結語尾と共に文を結んだり、冠形語尾と共に冠形節(句)を導いたりする点でも同一である。次の例文の a は、語尾 *-tis* が *ha-* を伴い、さらにそれに終結語尾が付いて文を結んでいる例である。b は完全な文ではないが、*-tis* + *ha-* が冠形節を導くよう a を変形したものである。

9 a kɪ ɪi kəlɪmkəli nɪn matʃ'i wənsugi ka kət tɪs ha ta.
 “彼”属 “歩き方” 話 “あたかも” “猿” 主 “歩く” 終

b wənsugi ka kət tɪs ha n kɪ ɪi kəlɪmkəli.
 冠

10 a kɪ ɪi mosip ɪn matʃ'i putɔŋmjəŋwəŋ i sə is' tɪs ha ta.
 “彼”属 “姿” 話 “あたかも” “不動明王” 主 “立っている” 終

b putɔŋmjəŋwəŋ i sə is' tɪs ha n kɪ ɪi mosip.
 冠

11 a *kɪ nal ɪn pi ka manhi was' (< o as') nɪnte, matʃ'i hanɪ i
 “その” “日” 話 “雨” 主 “たくさん” “降る” 過 “が” “まるで” “空” 主

ulko is' tɪs hes' (< ha jəs') ta.
 “泣いている” 過 終

b *hanɪ i ulko is' tɪs han kɪ nal ɪi naɪs'i.
 冠 属 “天気”

例11の a b において、語尾 -tɪs が連結している ulko is' は出来事の継続を表わしており、それは無意識的状态に近いと言える。例11の a b が共に不適格である理由は、一見ここに求めることができるように思える。しかしながら、ha- を伴った語尾 -tɪs は、次の例が示すように、ulko is' とは違って形態的にアスペクトについて無標である動詞にも、それが出来事を表わしていれば連結しない。

12 a *kɪnjə ɪi moksoli nɪn ɪn tʃɛŋpan e oksul i kulləka tɪs hes' (<
 “彼女” 属 “声” 話 “銀” “お盆” 処 “玉” 主 “転がる”
 ha jəs') ta.
 過 終

b *ɪn tʃɛŋpan e oksul i kulləka tɪs ha n kɪnjə ɪi alɪmtau n moksoli.
 冠 “美しい” 現冠

13 *sutʃ'ənman nalak ilo k'ɪllje t'ələtʃi tɪs ha n kipun i ta.
 “数千万” “奈落” 処 “引かれて” “落ちる” 冠 “気分” 指 終

14 a *kɪ əlkul ɪn k'um il k'u tɪs hes' (< ha jəs') ta.
 “その” “顔” 話 “夢” 対 “夢見る” 過 終

b *k'um il k'u tɪs ha n əlkul.
 冠

さらに、次の例が示すように、無意識的状态を表わす動詞に連結しないのは、-tɪs 単独の場合と変

りがない。

15 a *kɪ amhɪk sekje nɪn tʃukə is' tɪs həs' (< ha jəs') ta.
“その”“暗黒” “世界” 話 “死んでいる” 過 終

b *tʃukə is' tɪs ha n amhɪk sekje.
冠

以上のことから、ha- を伴った語尾 -tɪs は意志によらない事柄を表わす動詞には連結されないという制約があると言えよう。出来事を表わす動詞にも連結しないという点で単独の場合よりも制約が厳しくなっていることに留意されたい。

さて、次の例は先の例 9～15 の -tɪs + ha- を補助形容詞 tɪsha- で置き換えたものである。これらがすべて適格であるところから、補助形容詞 tɪsha- にはなんら制約がないと言えよう。

9 a' kɪ ɪi kəlɪmkəli nɪn matʃ'i wənsuɟi ka kət nɪn tɪsha ta.
現冠 終

b' wənsuɟi ka kət nɪn tɪsha n kɪ ɪi kəlɪmkəli.
現冠

10 a' kɪ ɪi mosɪp ɪn matʃ'i putoɟmjəɟwag i sə is' nɪn tɪsha ta.
現冠 終

b' putoɟmjəɟwag i sə is' tɪsha n kɪ ɪi mosɪp.
現冠

11 a' kɪ nal ɪn pi ka manhi was' nɪnte, matʃ'i hanɪl i ulko is' nɪn tɪshes' (< tɪsha
現冠

jes') ta.
過 終

b' hanɪl i ulko is' nɪn tɪsha n kɪ nal ɪi nals'i.
現冠

12 a' kɪnɟə ɪi moksoli nɪn ɪn tʃɛɟpan a oksul i kullə ka nɪn tɪshes' (< tɪsha jəs') ta.
現冠 過 終

b' ɪn tʃɛɟpan e oksul i kulləka nɪn tɪsha n kɪnɟə ɪi alɪmtau n moksoli.
現冠

13' sutʃ'ənman nalak ɪlo k'ɪllɟə t'əllətʃi nɪn tɪsha n kɪpun i ta.
現冠 現冠

14 a' kɪ əlkul ɪn k'um ɪl k'u nɪn tɪshes' (< tɪsha jəs') ta.
現冠 過 終

b' k'um il k'u nin tisha n əlkul.
現冠

15 a' kɪ amhɪk sekje nin tfukə is' nin tɪshəs' (< tisha jəs') ta.
現冠 過 終

b' tfukə is' nin tisha n amhɪk sekje.
現冠

4 形式名詞 jaŋ

形式名詞 jaŋ は、語尾 -tɪs(i) や副詞 tɪs(i) と同じように、副詞節(句)を導く。次の例文は先の例文 1 ~ 8 の -tɪs(i), tɪs(i) を jaŋ で置き換えたものである⁸⁾。

1' t'am i mul hɪlɪ nin jaŋ ima lɪl nɛljəo nta.
現冠

2' kojaŋi ka tʃuɪ tʃap nin jaŋ kɪ nin tɛmpjə tɪl əs' ta.
現冠

3' *kɪ pɪltɪŋ ɪn kəɪn i sə is' nin jaŋ hanɪl ɪl hjaŋhe nɔp'i sɔsa olɪko is' əs' ta.
現冠

4' *i tosi nin matʃ'i simɪn tɪl i pjəŋ tɪlə is' nin jaŋ hwəŋp'jehako is' ta.
現冠

5' *kɪ hepjən ɪn pata k'atʃi tʃam tɪlə is' nin jaŋ tʃɔjɔŋhes' ta.
現冠

6' kɪ nin nɛpet' nin jaŋ malhes' ta.
現冠

7' kɪ nin matʃ'i s'ɪlɛtʃi nin jaŋ kɪ tʃali e antʃ as' ta.
現冠

8' *simja ɪi kjosɪl ɪn tfukə is' nin jaŋ kojoha ta.
現冠

不適格である 3' の sə is'-, 4' の pjəŋ tɪlə is'-, 5' の tʃam tɪlə is'-, 8' の tfukə is'- が全て状態を表わしているところから、一見 jaŋ は状態を表わす動詞には連結されないように思える。しかし、この考えが誤りであることは、次の例文が、5' と同じ tʃam tɪlə is'- に jaŋ が連結しているにも拘らず適格であることから明白である。

5'' kɪ hepjən ɪn pata k'atʃi tʃam tɪlə is' nin jaŋ amu soli to tɪlli tʃianh
“何の” “声” “も” “聞こえる” 否

as' ta.
過 終

5" は 5' の *jaŋ* 以下を書き換えたものであるが、主文の述語を見ると、前者の *tilli tʃianh-* は出来事、後者の *tʃojogha-* は状態を表わしている。さらに、次の例文も *pjəŋ tɬə is'* が状態を表わしているにも拘らず適格である。ここでも述語は出来事を表わしている。

- 16 *kɪnjə nɪn pjəŋ tɬə is' nɪn jaŋ ansek i p'aliha ke pojəs' (< poi*
 “彼女” 話 “病気に罹っている” 現冠 “顔色” “やつれている” 副 “見える”
əs') ta.
 過 終

ここで、不適格である 3', 4', 5', 8' の述語を見ると、全て状態を表わしていることが分かる。ここから、*jaŋ* には述語が状態を表わしてはいけないという制約があると言えよう。1', 2', 6', 7', 5", 16 が適格なのは、これらの文の述語がこの制約を犯していないからである。さらに次の例文を検討されたい。

- 17 *tʃɔŋtalse i n jaŋ | nolɛ pulɪ nta / *tʃulkəp ta |.*
 “ひばり” 指現冠 “歌う” 終 “楽しい” 終
 18 **kɪ nɪn tʃaŋsa i n jaŋ him i se ta.*
 “彼” 話 “力士” 指現冠 “力” 主 “強い” 終
 19 *kɪnjə nɪn əline i n jaŋ kɟijəp ke poi nta.*
 “彼女” 話 “子供” 指現冠 “かわいい” 副 “見える” 終

5 おわりに

以上の考察から、語尾 *-tɪs(i)*、形式名詞 *jaŋ* を含む、比況表現の文は、それぞれその直前の用言、文末の述語が特定の意味資質を持っていなければならないことが明らかになった。ここから、これらは特定の事柄を、それぞれ喩えるもの、喩えられるもの⁹⁾として示すと言うことができよう。そして、これはそれぞれの意味の一部に違いない。一方、副詞 *tɪs(i)* と補助形容詞の *tɪsha-* については、それらが示す喩えるもの、または喩えられるものが特定のものでなければならないということ はなさそうである。今後は別の角度からの考察が必要であろう。

注1 例えば、国語学会編(1980)の定義(p. 721)中に用いられている言葉は定義としては日常的すぎるように思える。また、比況表現に用いる文の型から見た定義がなければ、他の比喻表現との違いも明確にはならないだろう。

2 これらは基本的には副詞節(句)、冠形節(句)を導くか、文を結ぶ機能を持つ。そして、その節や句が表わす事柄がなにかの喩え、つまり喩えるものであり、文の残りの部分が表わす事柄が喩えられるものであると理解してよいだろう。ただし、節や句の主要構成素が名詞である場

合はその表わす具象、抽象の物が喩えるものとなろう。

- 3 語尾 -tis と -tisi, 副詞 tis と tisi の差異については、筆者の知る限り特別な言及はなされていないが、比況表現に用いられる文中では若干の差がある。これについては注7を参照されたい。

- 4 特に、これらの前承用語や文末述語にどのような意味資質を持っているものが立つか(あるいは立たないか)を調べるのが重要であろう。これが明らかになれば、これらの導く節や文の主語にどのような名詞が来るかも自ずと明らかになろう。

なお、本文中の例はハングルをローマ字に転写し、必要と思われる程度に要素分解して以下の符号または略字を付して示した。また、インフォーマントには広島大学留学生の金桂植さんをお願いした。

| | |
|--------|-----------|
| “ ” 意味 | 副 副詞形語尾 |
| 主 主格語尾 | 過 過去語幹形成辞 |
| 属 属格語尾 | 冠 冠形語尾 |
| 対 対格語尾 | 現冠 現在冠形語尾 |
| 処 処格語尾 | 終 終結語尾 |
| 話 話題助詞 | 指 指定詞 |

- 5 本小稿では形容詞に連結する場合は扱っていない。状態を表わす動詞に連結しないものは形容詞にも連結しないのではないと思われるが、この点はなお吟味の必要があろう。

なお、「動詞」という名称は、二語以上の動詞から成り、かつ全体が不可分の一体であるものにも用いた。

- 6 例文4において語尾 -tis(i) の適格性がやや高いのは、インフォーマントの直観によれば pjəŋ tɬə is' と述語の hwəp'jəhako is' の「イメージが近い」からだそうである。このことは、語尾 -tis(i) の本小稿が扱い得ない意味に関係しているのであろう。

- 7 本文の例9, 10において、語尾 -tis に続く ha- の終結語尾が -nta ではなく -ta であること、冠形語尾が現在時制と考えられるところで -nin ではなく -n であることから見て、この ha- は少なくとも活用の面からは形容詞とすべきである。しかし、従来の文法は形容詞 ha- を認めておらず、しかも、この ha- には実質の意味はないように思える。語尾 -tis と一語を成している可能性も含めて、今後さらに検討されなければならないだろう。しかし、次の例の ha- は活用の面からも意味の面からも動詞である。

- wanak katfismal il t'ək mək tis ha nin njəsək i la... (柳光祐 「出『エデン』記」)
“たいへん” “嘘” 対 “餅” “食べる” 現冠 “奴” 指 “から”
(= “たやすく”)

ところで、崔(1929), Martin (1978), 李(1981), 申 & 申(1983)を見る限りでは、語尾 -tis

と -tisi, 副詞 tīs と tisi は一般に区別されていないようである。確かに, これらの連結する用言の性質には差はなさそうである。しかし, 語尾 -tisi, 副詞 tisi に続く ha- は, 本文の例10 a' を書き換えた次の例が示すように明らかに動詞である。

- kɪ li mosip in matf'i putogmægwaŋ i sə is' - | *tisi ha ta / tisi ha nta / *nin tisi ha ta / nin tisi ha nta | .

8 例文 1' において mul の後に主格語尾が, 例文 2' において tʃqi の後に対格語尾が省略されているのは, これらの適格性を維持するためであるが, なぜそうなのかは未詳である。

9 注 2 参照のこと。

参 考 文 献

- 国語学会編 (1980) 「国語学大辞典」東京堂
- 崔 鉉 培 (1929) *Ulimalpon*. pp. 532-534. 正音社
- 申 & 申 (1983) *Seulimalk'msatʃən*. 三省出版社
- Martin, S. E. (1978) *A Korean-English Dictionary*. Yale Univ.
- 李 熙 昇 (1981) *Kukətəsətʃən*. 民衆書林